

東京大学 文科

国語

満点	120点	目標得点	80点	試験時間	150分	偏差値	文I 74 文II 73 文III 72
大問数	4 (現代文2題・古文1題・漢文1題)			小問数	22		
	[解答形式]	選択式	0/22問		記述式	1/22問	
	[問題難易度]	C	0/22問	B	12/22問	A	10/22問

※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

Topics

- 1… 現代文二題、古文一題、漢文一題。二〇〇〇年度以降の形式が踏襲された。例年と同じく、漢字の設問を除いて全て論述形式の問題である。
- 2… 字数制限が設けられたのは、例年通り、現代文第一問の(五)のみ。それ以外の設問は全て一行×二行の解答欄にまとめなくてはならない。一行の解答欄に書くことが出来る字数は、長くて三三文字程度である。
- 3… 現代文・古文・漢文ともに、昨年度よりも読みやすい文章だった。しかし、いざ解答を作成しようとするとなかなか難しい。読解した内容を簡潔に説明する表現力が、例年以上に求められる設問だった。

「こんな力が求められる！」

東大の問題を解くために、特別な知識は必要ない。現代文・古文・漢文とも、全て基礎的な知識さえ持っていれば読み解くことが可能な設問ばかりだ。たとえば現代文であらかじめ知識として持っていない必要はない用語は、今年の問題で言えば、「イデオロギー」「アイデンティティ」程度だ。古文にしても基本的な単語と文法力さえあれば十分に読解することが可能である。漢文においても基本的な句形と漢字の知識さえあれば何も問題は無い。といっても、東大の国語が簡単だというわけではない。ちらっと問題に目を通して、東大の国語は簡単だと思ふのなら、勘違いも甚だしい。

東大の国語で難しいのは、読み取った内容をどのように説明するかなのだ。しかもだらだらと冗漫に説明する余裕はない。東大が用意している解答欄は、受験生に簡潔な答案を求めている。だから東大を目指す受験生は何よりも、東大に照準を合わせた解答を作成する能力を身につけなくてはならない。そして、それこそが最も自分のものにするのが困難な能力なのである。

もちろん東大も、受験生には手強い文章を出題することがある。二〇〇五年度や二〇〇八年度の第一問の現代文などは、その典型だ。それらの現代文がテーマにしていたことは、東大の教養学部で扱われるような内容だった。つまり東大の国語は、駒場での講義に直結しているのだ。東大は駒場で、教養学部の講義を楽しむことの出来る者を選び抜こうとしている。東大を目指すのなら、そのことを念頭に読解力と思考力も磨き上げていかななくてはならない。

具体的な目標としては、OS東大国語で課せられる添削で、六割以上の点を毎回確保できるようにしてもらいたい。毎週返却される自分の答案を見直して、点が取れる解答を目指して毎週トレーニングを積むことが大切だ。

なおセンター試験については、言うまでもなく出来る限り点を確保しなければならない。さもなければ東大を受験することすら叶わなくなる。コンスタントに九割(二八〇点)以上取れるようになれば安心だ。失敗しても、八割(一六〇点)にとどめられるようになりたい。

大問別分析

【第一問】

予想配点	40 / 120点	時間配分の目安	50 / 150分
文章の種類／ジャンル	現代文／評論		
〔出典〕	阪本俊生『ポスト・プライバシー』（青弓社、二〇〇九年一月）		
〔文字数〕	約二七〇〇字		
出題形式	論述式5題、記述式1題（漢字）		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
(一) B	(二) B	(三) A	(四) B
(五) B	(六) A		
お茶ゼミカリキュラムとの関連 O S 東大国語			

● 本大問の特徴・概要

- 問題文の分量は、昨年度よりもやや増加した。出題形式は、二〇〇〇年度以降の形が踏襲された。
- (一) ～ (四) は二行の解答欄に説明をまとめる（長くても六十五字前後で解答をまとめなくてはならない）。(五)のみ一〇〇字以上二二〇字以内という字数制限が設けられた設問だったことも例年通り。ただし問題文の内容以外のことをふまえて説明させる設問は、これまでにないものだった。
- 問題文の内容は、近代から現代にかけての個人と社会の変容を「プライバシー」をキーワードに論じたものだった。筆者の阪本俊生は社会学の研究者。入試ではほとんど見かけない名前だが、文章の内容そのものは、東大の国語ではお馴染みのものだった。近代との対比で現代を論じるのは、東大に限らず入試現代文の王道である。東大でも二〇〇七年度の第一問で出題された浅沼圭司「読書について」をはじめ、しばしば出題されている。また個人を扱う文章もよく見かけるものだ。たとえば二〇〇四年度の第一問で出題されている。出典は伊藤徹「柳宗悦 手としての人間」で、現代における個人の解体を論じたものだった。すなわち今年度の第一問は、東大らしい現代文だったということに尽きる。東大入試を想定した問題で、論述答案を作成する力をくりかえしトレーニングした受験生なら、安心して取り組める問題だった。

● 注目すべき小問

- (一) 「内面のプライバシー」とはどういうことを説明させる設問。「内面」も「プライバシー」も難しい言葉ではない。わざわざ説明しなくても、わかってもらえる言葉だ。しかし東大は、そうした当たり前の言葉の意味を、問題文の文脈をふまえて説明することを求める。「内面」の説明は、まだ何とかなる。冒頭の一文をふまえれば、「個人の本质があると見なされているもの」などと説明可能だ。加えて傍線部直前にある「個人の社会的位置づけや評価に大きな影響力をもって作用した」という箇所をふまえれば文句はない。差がついたのは、おそらく「プライバシー」の説明だろう。第二段落にある「プライバシーのための防壁」の説明や第三段落の「プライバシー意識」の説明をふまえられたかどうか。さらに問題文が近代と対比して現代を論じる文章であることを想起するならば、傍線部があくまでも近代のことであることを説明に入れておく必要がある。また筆者自身は「内面」に「個人の本质がある」とは主張していないことも表現すべきだろう。この設問で点を取るためには、問題文全体の構造を視野に入れて、説明すべき内容を丁寧にかつ簡潔に表現していかなければならない。東大らしさが凝縮した設問だった。

【第二問】

予想配点	30 / 120点	時間配分の目安	30 / 150分
文章の種類／ジャンル	古文／説話		
〔出典〕	古今著聞集		
〔文字数〕	約八六〇字		
出題形式	論述式 7題		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
(一) エ A	オ A	カ B	(二) A (三) A (四) A (五) B
お茶ゼミカリキュラムとの関連 OS 東大国語			

● 本大問の特徴・概要

- 問題文の分量は、昨年度よりもやや増加した（約三〇〇字程度増加した）。
- 問題文及び設問の難易度も、ほぼ昨年度と同様であった。設問形式も例年通り。現代語訳と内容説明を論述で答えさせるものだった。
- 本年度出題されたのは『古今著聞集』だった。説話は、ここ最近の東大の古文では頻出のジャンルである。二〇〇三年度と二〇〇八年度には『古本説話集』、二〇〇七年度には『続古事談』が出題されている。説話を読み解くためには奇を衒った知識が必要とされることはない。基礎的な知識さえあれば、説話を読解することは可能だ。説話を出題し続けることの裏には、基礎力の習得こそを重視する東大の一貫した姿勢をうかがうことが出来る。
- 東大の国語において、第二問の古文は確実に点を積み重ねなくてはならない分野だ。問題文は理解しやすく、単語なども平易である。といっても、必ずしも簡単というわけではない。的確な現代語訳が出てきにくい細部までを問う設問も多々見られる。点を取るためには、細部まで確実に解釈出来る読解力と、読解した内容を着実に表現する論述力が必須なのである。表面的な読みやすさに安心するのではなく、東大を想定した問題でくりかえし読解力と論述力を訓練しなければならない。

● 注目すべき小問

- (一) 才 平易な表現であるからこそ思索して訳さなくてはならない設問だった。「れ」が受身であることに気づいた上で、文脈から「罪をおこなふ」を「処罰する」の意で解釈することが求められる。
- (二) カ 形容詞「くく」＋「は」の仮定表現は基本。「ゆる」という語は必ずしも基本単語ではないが、「聴」という漢字から推測することも可能だ。「身のいとま」は、捕った魚を僧みずから母のもとへ届けるための猶予の意。「聴りがたくは、この魚を母のもとへ遣はして」と続くところから判断し、表現を考える。現代語訳を問いながらも文脈を把握する力も見極めようとする東大らしい現代語訳の設問だった。
- (四) 罪科の重大さの説明を本文から明確にもってくる。直前の「いはんや」という表現を見落とさず、法令に背いた罪のみならず僧侶として仏の教えにも背くという二重の罪科をはつきり示し、簡潔にまとめなければならぬ。難しい問題ではないが、殺生禁断が仏の教え（僧侶の戒律）であるという常識が要求されてもいる。

【第三問】

予想配点	30 / 120点	時間配分の目安	30 / 150分
文章の種類／ジャンル	漢文／逸話		
〔出典〕	文瑩『玉壺清話』		
〔文字数〕	一七六字		
出題形式	論述式 5題		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
(一) B	(二) B	(三) A	(四) A (五) B
お茶ゼミカリキュラムとの関連 OS 東大国語			

● 本大問の特徴・概要

- 問題文の分量は昨年度よりも三二字増だが、内容的には昨年度より読みやすいだろう。近年の東大の漢文は短いながらもひとひねりある展開の文章が多かったのだが、本年度は一直線で特に複雑なところもなく、大まかな内容はつかみやすかったと思われる。
- 出題形式は従来どおりの記述式で、(一)(二)(四)(五)は解答欄一行(三〇～三五字)、(三)は解答欄一行半(五〇字前後)。出題内容も従来どおり、口語訳と説明問題ばかりで、書き下しの設問はない。昨年度出題された空欄問題は姿を消した。

● 注目すべき小問

- (一) 「惜」の意味がポイント。ここでは『大切にする・かわいがる』といった意味である。「惜」にそのような意味があることを知っていればもちろん一番よいのだが、知らなくてもこの文脈でそのまま『惜しむ』と訳してはおかしい、ということには気づきたい。
- (二) 送り仮名省略の問題。東大は返り点を省略することはまずないが、送り仮名の省略はときどきあり、その場合は何かしら重要句法・語法を問うていることが多い。ここでは文末の「否」がポイント。文末の「不・否」は疑問形のひとつで、「くやいなヤ」と訓読し『くかどうか』の意をあらわす。私大でも頻出の句法である。
- (五) これも送り仮名省略の問題だが、最大のポイントは「道」で、下から返っている以上ここでは動詞の用法(「いふ」と訓読する)である。これもその用法を知っていればそれが一番だが、知らない場合は熟語を思い浮かべることからはじめよう。「道」を用いた熟語で動詞として使うもの、つまり「道〇する」あるいは「〇道する」という形で使えるものが何かないか。そこで「報道する」を思い浮かべられれば、この「道」は『伝える』というような意味だろう、とわかる。もうひとつのポイントは文末処理で、この傍線部が傍線部dの仮定条件(若し見ゆる時あれば)を受けていることに注意。仮定条件は「実現していないこと」を述べるものであるから、それを受ける文末も「実現していないこと」を述べる推量・意志・命令などの表現になるのが普通である。この場合は『あなたが段さんに会ったら』につづく箇所なのだから、『くと伝えてくれ』のように命令形にするのがよい。

【第四問】

予想配点	20 / 120点	時間配分の目安	35 / 150分
文章の種類／ジャンル	現代文 / 評論・随筆		
〔出典〕	小野十三郎「想像力」（『詩論＋続詩論＋想像力』所収、思潮社・二〇〇八年十月）		
〔文字数〕	約二〇〇〇字		
出題形式	論述式 4題		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
	(一) A (二) B (三) B (四) B		
お茶ゼミカリキュラムとの関連	OS 東大国語		

● 本大問の特徴・概要

- 問題文の分量・難易度ともに昨年度並みだった。
- 二〇〇〇年度以降の形式が踏襲された問題だった。傍線部の内容・理由の説明を二行の解答欄にまとめさせる設問が四題。字数制限は設けられていないものの、解答欄の大きさに鑑みると、説明は長くても六十五字前後におさめなければならない。簡潔に説明しうる表現力が求められる。
- 問題文の筆者である小野十三郎は詩人。詩人が書いたエッセイは、東大の第四問では頻出のものだ。二〇〇七年度の清岡卓行「手の変幻」、二〇〇五年度の小池昌代「背・背なか・背後」、二〇〇三年度の篠原資明「言の葉の交通論」、二〇〇〇年度の三木卓「海辺の博武官」と定期的に出題され続けている。
- 問題文は、詩人と読者の想像力を扱いつつ、現代詩とは何かを述べたものである。第一問の現代文に比べると第四問では随筆色の強い文章が出題される傾向があり、受験生の中には「感性」や「感受性」で「感覚的」に文章を読まなくてはならないと勘違いしている者がいる。もちろん、文章を読む上でそういう力も重要だ。しかし設問を解いていくためにまず必要とされるのは、第四問においても、論理展開を構造的に把握する力なのである。今年度の問題でも、設問は意味段落の展開に則って作られている。
- (一) では詩人の想像力、(二) では読者の想像力、(三) では詩人の想像力とそれを受け止める読者の関係、(四) では詩人と読者の想像力の「質的な核」が問われている。問題文の論旨に即して、ここぞという急所に傍線が付されている。第四問の現代文を解いていく上で肝要なのは、底流する論理展開を捉えた上で、傍線の内容や理由を簡潔に説明する力なのである。

● 注目すべき小問

- (四) 最終段落にある「その現実の中での経験の質的な核を破壊することはできない」という箇所の理由を説明させる問題。傍線部の後にある「どのような詩人の持っている想像力も…いついかなる場合においても現実をふまえ…生活をひきずっている」という箇所に気づけば、「想像力はどのような場合でも現実の生活で経験したものをふまえたものでしかないから」といった説明は簡単にできるはずだ。注意すべきは、傍線部の前の行、最終段落の冒頭に「ここにおいて、再び問題になってくるのは経験である」とあることだ。つまり最終段落は、前段落の末尾で記されていた「読者の側」の「想像力」をふまえた内容になっているのである。したがって解答を作成する際には、詩人だけでなく読者の想像力もふまえた説明を心がけなければならない。問題文全体の論旨に注意していれば、筆者が最終段落で詩人だけを問題にするわけがないということには気づけるはずなのだが、なかなか難しかったと思われる。論理展開を把握する力をどこまで鍛えていたか、それが勝負の分かれ目となったのではないだろうか。